

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

| | | | | | | | |
|----------------|------------------------|--|----|----------------|--|-----------|--|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | | | 文学研究科 | | 日本文学専攻 | |
| 指導教員 | 所属・職名 | | | 氏名 | | | |
| | 文学部・教授 | | | 渡辺 憲司 印 | | | |
| 自然・人文の別 | 自然 ・ 人文 | | | 個人・共同の別 | | 個人 ・ 共同 名 | |
| 研究課題名 | 大正文壇の近世資料受容 | | | | | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | | | 氏名 | | | |
| | 文学研究科・日本文学専攻 後期課程5年 | | | 丹羽 みさと 印 | | | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | | | 氏名 | | | |
| | | | | | | | |
| 研究期間 | 2007 | | 年度 | | | | |
| 研究経費 | 200 | | 千円 | | | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

大正文壇を鮮やかに彩った作家の一人に岡本綺堂がいる。本研究では、綺堂に影響を与えた父、岡本敬之助に焦点を当てて、綺堂の教養背景について考察を行った。敬之助は英国公使館に勤務していたが、同僚であったアストンやガビンスなどの英国人と親しくつきあっていた。また九代目市川団十郎や、十二代目守田勘弥などの演芸関係者とも親しく、当時彼らが牽引していた演劇改良運動にも関わっていた。このような敬之助の動向が、綺堂に語学の知識を授け、また演劇への関心を育てた事を明らかにした。

また江戸川乱歩の『押絵と旅する男』を、関東大震災との関わり方から考察を行った。これは今後行われる、乱歩の八百屋お七受容論への布石である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[岡本敬之助] [英国公使館] [江戸川乱歩]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

綺堂ははじめ、劇作家として立脚した。その後はドイルのホームズシリーズに創作意欲をかき立てられ、『半七捕物帳』を上梓し、また江戸に関する随筆、『江戸っ子の身の上』などを発表し続けた。これら綺堂作品に対してはいくつか先行研究があるものの、綺堂の文筆活動に大きな影響を与えた父、敬之助に関しては、看過されてきた。しかし、綺堂が東京日々新聞に入社し、劇評家として多方面に知られていくのも、そもそものはじまりは同新聞社の社長関直彦と敬之助が知己の間柄であったため、入社運びとなったことにある。綺堂は新聞社での仕事を通して、歌舞伎の知識を深め、のちに劇作家へと転身し、大成していくのだが、新聞社入社を仲介した敬之助の役割は決して小さいものではない。岡本綺堂が文筆家として活動していく背景には、このように敬之助が何らかの形で関わっていることが多く、綺堂研究を行う上でも、なおざりにできない人物である。そこで、今回はこれまでほとんど顧みられなかった父敬之助の生涯とその著作について考察した。

敬之助は勤務先の英国公使館で英国人と親しく付き合っていたが、そのことが兄弟の公使館就職の助けとなり、また綺堂の語学力の形成にも大きな影響を及ぼした。綺堂のこの語学力がホームズシリーズの読破へとつながり、また『半七捕物帳』執筆へと昇華していくことを考慮すると、敬之助の公使館勤務がもたらした恩恵は、経済的な側面に留まらないことがわかる。

さらに演劇改良を追求する団十郎や勘弥が、彼らの劇場に西洋人からの贈り物である引幕を掲げるといふ箔を付けることができたのも、敬之助が窓口となり、英国公使館との交渉に当たっていたからである。演劇改良は政府の西欧化政策と歩調を同じくしており、団十郎らにとって敬之助は改良運動を促進するための重要な人材であったといえよう。そのようなこともあり、敬之助は団十郎の私的研究機関である求古会に参加していた。求古会は、発足から二年ほど後には、単に団十郎の出勤する劇を見物し、幕間にその部屋を訪問するだけになったが、会自体は団十郎が没するまで存続していた。敬之助は綺堂を連れて楽屋にしばしば出入りしており、また、上記の引幕を機縁として、守田勘弥が自宅を訪ねてくるなど、演劇関係者と活発に交遊していた。幼い頃から軌道の周辺にあったこのような環境が、劇作家岡本綺堂を作り上げる基盤となったことは先ず間違いないだろう。

綺堂が敬之助の人脈で、東京日々新聞に入社してから二週間後には、早くも五面に千歳座と中村座の劇評が掲載された。編集長の度量もさることながら、演劇に関する綺堂の知識が豊富であり、なおかつ確かなものであったからこそ、この短期間に掲載し得るほどの記事を書くことが可能であったのだろう。それは綺堂が幼い頃から直に演劇界の住人と相対していたことと無縁ではあるまい。また入社して半年ほど過ぎた夏、脚本の執筆を志した綺堂は、桜痴から添削指導を受けたいと願う。前年に敬之助とともに訪れた団十郎の楽屋で綺堂は桜痴と面会しているが、「公然出入りをするには矢はり改めて団十郎に紹介して貰った方が可からうといふので、私は父から団十郎に話して貰ふことにした」(「過ぎにし物語 十七」『新演芸』一九二二年一月)と、ここでも敬之助を頼っている。綺堂はおかげで無事に桜痴から許可を得ることができた。

天覧劇を当て込んで出版された『演劇改良三人笑語』(一八八七年)で、団十郎の演劇改良の理念に異論を呈した敬之助であったが、それによって両者の関係は崩れることがなかった。敬之助と団十郎が関わっていた敬之助が一九〇二年に没したときに、団十郎は弟子を差し向けており、最後まで両者の交遊は続いていた。彼が培ってきた人脈という豊穡な土壌は、多種多様な人々を育て、終には息子綺堂を作家として大成させることとなった。敬之助は、人々と交わることでその存在を示し続けた人物であったといえる。

なお、作家綺堂が敬之助から与えられた知識や経験をもとに、いかにして成長していったのかについては、今後の課題としたい。

研究成果の概要 つづき

本年度は岡本敬之助研究以外に、江戸川乱歩の「押絵と旅する男」（『新青年』一九二九年六月）を研究対象としてきた。乱歩は多くの作品を執筆した作家であるが、中でもこの作品には、特別な愛着と自信を持っていた。乱歩はかつて暮らしていた団子坂をモデルとし、「D坂の殺人事件」（『新青年』一九二五年一月）を執筆しているように、現実の体験を作品に生かしていく作家である。「押絵と旅する男」の冒頭で連綿と記される蜃気楼についても、一九二七年の三月以降に魚津で見た蜃気楼がもととなって執筆されている。蜃気楼の描写の中に、「曖昧な形の、真黒な巨大な三角形が、塔の様に積み重なって行ったり、またく間にくづれたり」という描写があるが、「押絵と旅する男」がこの後、舞台を浅草凌雲閣、通称十二階に移すことを考慮すると、「塔」に擬えたこの記述は、十二階を物語の舞台とする布石としても受け取れる。

「押絵と旅する男」では十二階の上層部と、その下の公園で、遠眼鏡をのぞいた結果起きる不思議な出来事が物語の主眼である。小道具として用いられている遠眼鏡には、レンズが付きものであるが、乱歩の息子、平井隆太郎は、「父は凹面鏡やレンズが好きであった。父がしばしば書いているように、それが非日常的な世界を作り出す魔力を備えていたからであろう」（「父の貼雑帖から(25)」『江戸川乱歩全集』月報 25 講談社 一九七九年）と追想している。乱歩がレンズの「魔力」に魅了されていたことがわかる。そのレンズを備えた遠眼鏡は、通常、遠近を転化させる作用がある。また遠くのものを見せるといふ構造に伴い、大小を転化させるという作用もある。この遠眼鏡の本質的な転化に伴い、「押絵と旅する男」でも、幻惑的な転化が効果的に用いられている。詳細は避けるが、十二階の下で遠眼鏡を逆からのぞいた場合には、人間であった兄が押絵人形に転化し、また、十二階の上で正しい方向からのぞいた場合には、押絵人形の娘が人間に転化する。この作品においてレンズの「魔力」は、遠眼鏡に限定された作用ではない。作品冒頭で詳述される蜃気楼もまた、「不可思議な大気のレンズ」を通してもたらされる現象として記されている。「大気のレンズ」を通した蜃気楼は見るものとの距離を縮め、その姿をだんだんと縮小し、距離感を希薄なものとしていく。乱歩はこの蜃気楼に対し、「焦点のよく合はぬ顕微鏡」でものを見たときの様子を引き合いに出して説明している。顕微鏡も遠眼鏡も、視覚的に物質の大小を反転させるという点で、顕微鏡と遠眼鏡の性質に変わりはない。つまり、「押絵と旅する男」に描かれた蜃気楼を作り出す「大気のレンズ」は、人間と人形、すなわち生物と無生物を逆転させる力を持った遠眼鏡と、転化という性質において同等である。同時に、そのレンズを通じて転化するという点で、蜃気楼と兄、そして蜃気楼と押絵の娘もまた同等の関係にあるといえる。

また乱歩は浅草を物語の舞台としているが、ここは乱歩がこよなく愛した場所であった。「浅草故の東京住ひといつてもいゝかも知れない」（「浅草趣味」（『新青年』一九二六年九月）と公言し、一九二六年一月、大阪から東京へ移住してきた乱歩であるが、かれが東京の地を初めて踏んだのは、一九一二年七月であり、一九二二年六月まで暮らしていた。この間、十二階に昇ったこともあっただろう。しかし、乱歩が大阪にいる間、十二階は関東大震災により崩壊し、数日後には爆破撤去された。乱歩にとって、再び足を踏み入れた浅草の空に十二階の姿が見えないのは受け入れがたい光景であったと思われる。「押絵と旅する男」の執筆背景には、この乱歩の体験は無視できないだろう。「押絵と旅する男」では、蜃気楼や、兄、人形を転化させていたレンズの「魔力」は最終的に失効し、物の本質までは変えることができないということが描かれている。このことから、乱歩は幻惑を乗り越え、十二階のない、現実の浅草を受け入れるための禊ぎとして「押絵と旅する男」を執筆したと思われる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

丹羽みさと「乱歩の和本コレクション。」

『東京人』2007年11月第246号 P.58～61

「雲を凌ぐ——「押絵と旅する男」と浅草十二階——」

『大衆文化』創刊号 2008年4月(予定) P.1～9